

保育者による即興的表現活動の実践について*

— 即興的音楽表現活動調査から —

井 中 あけみ
高 橋 うらら**

I. はじめに

本研究は、子どもたちの成長過程での音楽と身体の間を通して、子どもの主体性を育むための表現活動を探求していくものである。これまで筆者は、特に保育活動における乳幼児時期の表現の取り組み方に視点を置き、その表現活動が子どもたちの「資質・能力」を育てる土台を築くものとなるよう、その活動方法への調査を保育者養成校や保育現場にて行ってきた。

近年非認知能力について注目されるようになり、幼児期の発達を促す環境や保育者の関わり方が「非認知能力」への育みに与える影響については、多くの研究者達によつての調査研究も実践されている¹⁾。また、その中の研究では、「感性・表現力」が取り上げられ、各時期に大切にしたい体験について、「思い切り体を動かす」「自分なりの表現を楽しむ」「多様な感情体験をする」「動作や絵など多様な表現をする」などの項目が挙げられている。

近年、子どもたちのコミュニケーションの形態は変化しており、生活の中での人との関わりについては、「集団で関わる遊び」などの環境も減少している。そのため保育活動においては、子どもたちが積極的に遊びを通して自分を表現したり、人と関わったりすることを意識できるような主体的活動方法が必要であると考えられる。

ところが、筆者のこれまでの身体と音楽の即興的表現活動調査では、自発的又は主体的な身体や音楽についての表現活動において、保育者自身が実践の過程で不安や戸惑いを感じる事実が幾度か発見されている。保育者の考え方やその環境の在り方は、子どもたちの育ちに直接的に関わるものであり、保育者が考える音楽や身体への主体的表現活動への気付きや理解は必要不可欠なものといえるであろう。特に「主体的・対話的な学び」を考えるとすると、これまでの規制的で受け身の要素の強い身体や音楽の保育活動だけでは、その実現に近づいていくことは困難であろう。そこで今回は、前回の調査で用いている²⁾、「即興的身体表現活動と即興的音楽表現活動」の両者を実施し、保育者たちの表現活動の感じ方、また即興的身体表現活動前後の表現の変化、子どもたちの主体的表現活動のイメージ化などへの意識調査を、簡易楽器を中心とした保育者の即興的音楽表現活動から収集分析することとした。

※ 本論は、2021年5月15日(土)・16日(日)の第74回『日本保育学会』にて、ポスター発表(オンライン)で行った「創造的表現活動の実践について—保育者による音楽と身体の間での即興的表現活動から—」データを基に加筆したものである。

※※東京都市大学 人間科学部 児童学科 准教授

1) 文部科学省『幼児期の非認知的の能力の発達をとらえる研究』文部科学省 2016年 p.22

2) 井中あけみ、高橋うらら著 日本保育学会第73回ポスター発表より

語義規定

本研究における「即興的身体表現活動」は、「感じたこと考えたことを自由に身体で表現すること」を示す。また、「即興的音楽表現活動」については、楽譜を用いず「感じたこと考えたことを自由に楽器で表現すること」であり、拍子や速度、リズム、メロディーなどの規定はなく、旋律のある曲などとは異なるものを示す。

II. 研究目的

本調査は、領域「表現」に基づいて、乳幼児期の「音楽」と「身体」の表現活動に視点を置き、その表現における保育者と子どもとの関わり方や、表現の環境の在り方から子どもたちの主体性を育む表現活動を調査していくものである。汐見は、保育所保育指針の改訂の中の「養護に関する基本的事項」について次のように述べている。「失敗しても絶対にとがめないという安心できる環境・指示語、命令語、禁止語が聞こえてこない温かい言語環境等々」³⁾である。

これまで保育現場の音楽活動や身体活動の指導については、作品の技術的な面に重きを置き、「見栄え」を尊重した表現活動が主流とされてきたことは、保育者たちへのこれまでのアンケート調査⁴⁾によっても証明されている。しかし、2018年保育所保育指針⁵⁾、幼稚園教育要領⁶⁾の改訂がなされ、「主体的・対話的で深い学び」が全ての教育課程において授業改善が進められたことにより、保育者たちの表現活動への取り組み方には、乳幼児の成長期段階において大きな戸惑いが発生したと考えられる。長坂・高畑・糟谷⁷⁾は、「子供の主体的な表現を尊重するあまり、保育者がただ見守っているだけの音楽活動、包括的かつ曖昧な「音楽を楽しんでいる」という言葉で片づけるような状況や、幼児の表現があらゆる場面で行われているために対応できない、表現を読み取る方法が分からない、幼児と共に育ちあう関係になるのが難しいなどの声が現場から上がる。」について触れている。これは、過去の調査アンケート⁸⁾からも同様の言葉が聴取され、保育者自身がそれらの諸活動への問題点を感じていた。

無藤⁹⁾は、園における音環境と表現についての中で、「われわれの世界は音が充満しているわけで、その気付きに、あるいはその経験をどう導いていくのかということ、本来大きな教育的な過大なわけです。それは、音楽という教科とか、いわゆる音楽というジャンルよりも一中略一人間経験の基盤としてあるはずです。そのことに従来あまり注目がいってなかったのではないのでしょうか。」と語っている。

子どもたちの創造性を豊かにする表現活動の中でも、音楽活動について、坪能・木村・味

3) 無藤隆・汐見稔幸・大豆生田啓友著『乳幼児の教育・保育の未来』p.30

4) 井中あけみ・高橋うらら著「表現活動を豊かにする音楽研究(2)」『豊橋創造大学短期大学部研究紀要第34号』2017年 p.34

5) 『保育所保育指針』厚生労働省 2017年3月31日告示

6) 『幼稚園教育要領』文部科学省 2017年3月31日告示

7) 長坂希望・高畑敦子・糟谷由香「子供の主体的表現を引き出す援助に関する検討:即興的音楽づくりを通して」『武蔵野教育学論集第6号』2019年 p.19

8) 井中あけみ・高橋うらら著「子どもの自発的表現を引き出す音楽素材に関する調査」『日本保育学会第71回ポスター発表』2018年

9) 無藤 隆著『幼児教育のデザイン 保育の生態学』東京大学出版会 2013年 p.70

府・小川・裴¹⁰⁾は、「Creative Music Making (創造的音楽学習)とは既成の音楽を歌ったり、演奏したりするのではなく、自ら音楽をつくる表現活動を指し、身の周りすべての音を使って子どもが主体的に音楽をつくる活動」としている。これらの活動が、幼少期から保育者養成校までの成長過程に保育者自身が経験していないとすれば、当然のごとくその認識は困難なものとなるはずである。また、これまで、大人である保育者は、子どもが遊びの中から表現する感性は抽象的でわかりづらいという場合もあり、「見栄え」「出来栄え」を推奨してしまうことは否めないものであったともいえる。持田・金子¹¹⁾は、「大人にとってわかりやすいリズム、メロディー、ハーモニーといった音楽をさせることを優先させてしまう保育者の介入は、却って子どもの創造的な表現を中断させる可能性があることがわかった。」と観察記録から結果を述べている。

子どもの表現したい気持ちを汲み取り、見守る保育者の言動は、音楽的活動、身体的活動の面においても、保育者が子どもにとって大きな影響を与える存在であることは、保育全般においていわれていることである。そこで、本研究では、保育者にとっても、子どもにとっても親しみやすい楽器を使用し、子どもたちの主体的な活動を誘発する表現活動について、保育者と子どもが同じ視点からの表現をやり取りし、共有できる活動を想定し、今回は、保育者同士の即興的音楽表現活動を実施することとした。

日頃の保育者の音楽的役割といえば、「童謡の弾き歌い」、「歌唱指導」「合奏による楽器の演奏法の指導やリズム指導」などがある。また身体的なものでいえば、決められた動きを音に合わせて覚えさせるなどである。そこには、保育者自身の専門的技術力や専門的知識が必要とされており、子どもの自由な発想からは離れた活動となる。さらには、近年保育者養成校へのピアノ未経験入学者増加に伴い、ピアノの技術修得の低下がみられるようになってきていることもあり、保育者の技術力に頼ることだけでは、表現教育の質の向上は期待できないであろう。今回の取り組みについては、現場保育者が、身体や音楽の専門性に対して難色を示すという傾向にあることも考慮した調査でもある。吉村・柴崎は、このピアノ技術修得困難な保育者の増加傾向の数についてのデータを調査している¹²⁾。

筆者は前回の調査において、保育現場で保育者が最も活用している楽器であろう「ピアノ」での即興的音楽表現活動調査を実施した。しかし、保育者の中からは、苦手意識を持つ声も上がっていたことから¹³⁾、今回は簡易楽器を主とした活動で実践・調査を実施することとした。長坂・高畑・糟谷¹⁴⁾は「子供の主体性を重視した音楽教育の実現」への可能性として、「適切な環境設定や援助を用いれば、音楽、特に子どもにも操作しやすい簡易楽器を用いた即興的な音楽活動は主体的表現を引き出しやすい」としている。本研究において、

10) 坪能由紀子・木村充子・味府美香・小川博久・裴珉ぎょん「幼児の創造的な音楽活動の開発に関する研究Ⅰ」『日本女子大学大学院紀要 人間生活学研究科第11号』2005年 p.227

11) 持田京子・金子智栄子「子どもの創造的音楽表現に及ぼす保育者の影響」『文京学院大学人間科学部研究紀要』Vol.10.No.1 2008年 p.44

12) 吉村淳子・芝崎美和著「保育者養成校におけるピアノ指導について— 学生の自己効力感に着目して—」『新見公立大学紀要 第36巻』2015年 p.59

13) 井中あけみ・高橋うらら・朝元 尊著『自発的な表現を不自由に行っている保育者の意識について— 即興的身体表現と音楽表現の調査から—』「日本保育学会第73回」ポスター発表 2020年

14) 長坂希望・高畑敦子・糟谷由香著「子供の主体的表現を引き出す援助に関する検討:即興的音楽づくりを通して」『武蔵野教育學論集 第6号』2019年 p.27

保育者自身が主体的な表現を理解し、子どもと表現を共有できる表現活動を可能にすることを目的とし、簡易楽器への着眼を試みた。また、これまでの調査からのデータを基に、即興的身体表現活動の導入を行い、保育者たちの既成概念となっている、楽器の演奏技術を高めるといった子どもたちへの技術指導（出来栄え）の固定観念を取り除き、身体により自然な動きから、演奏に抵抗のないより自然な音楽的表現活動を創っていくため、身体と音楽が自然と共生する表現活動を期待した実践をすることとした。

Ⅲ. 調査方法

今回の調査は、保育者同士による即興的表現活動について2つのグループを設定して実施していくこととした。子どもの自主性を重んじた表現活動方法にできる限り近い内容や取り組み方を考え、保育者自身が即興的音楽表現活動と即興的身体表現活動の両者を体験することで、自発的と考えられる活動にどのような心理的影響や心情の変化、実践的体験のイメージを獲得していくかを、活動映像やアンケート調査で確認しようとしていくものである。

[調査について]

①調査人（筆者）

身体表現専門家（高橋）、音楽表現専門家（井中）、幼児体育専門家（朝元）

②被験者 静岡県H市J幼稚園保育者9人

－ 担任の経験年数－

保育者経験年数	数	担当クラス
1年目	1名	年少
2年目	2名	年少 年中
3年目	1名	年長
4年目	2名	年中 年長
7年目	1名	フリー担当
9年目	1名	年少
24年目	1名	フリー担当

③場所 静岡県H市J幼稚園 多目的室【お遊戯室】

④日時 2020年12月7日（月）保育終了後 午後15時から16時

⑤調査方法

調査は、動画撮影（身体・音楽）による記録と調査人3名の目視としている。また事前事後の個々のアンケート調査を実施し、それを基に、保育者の自発的表現活動の活動記録についての分析を行うこととした。


ここでは、調査を開始する前に、個人を特定することは絶対にしないこと、また撮影記録に個人名を公表しないことについては、筆者と約束をした。また、発表の内容が、園の勤務評価に影響するなどのことは、絶対起り得ないことを経営者から明言していただき調査を開始した。

⑥保育者への即興的表現活動実施の説明について

保育者たちへの活動の説明は、保育者個人がそれぞれ自由な感覚で、自発的な活動ができることを目的としたため、詳細に説明はせず、以下のような概要を提示した。また、使用楽器については、子どもたちが馴染みのある簡易楽器を中心として表示した。

テーマ「迫りくる恐怖」については、コロナ禍の最中における社会的状態に、人々に何らかの共通意識があると推定し、筆者が提案したものである。また直接的理由としては、2つのグループでテーマを統一することで、その表現の内容に大きなズレの問題をできる限り避けることを目的とした。

— 保育者による即興的音楽表現活動 —

テーマ : 「迫りくる恐怖」 発表方法: グループA・・・5名 グループB・・・4名	
①	即興による音楽表現の準備 <保育者たちの楽器選択の様子>  1. 楽器の種類や音色についての紹介をする 2. 個人が演奏したい楽器を選択 (数は制限しない) <楽器の種類 (簡易楽器を中心とする)> タンブリン・すず・フレクサトーン・ウインドチャイム カバサ・オーシャンドラム・ハーモニックパイプ・シンバル トライアングル・大太鼓・小太鼓・ウッドブロック・クラベス ヴィブラスラップ・木琴・鉄琴・ピアノ・グロッケン ※演奏前には、即興演奏についての話し合いはしないことを条件として提示した。
②	即興的音楽表現活動 (1回目) 2分前後の演奏時間とする ・1分30秒の時点で合図を調査人から行う。
③	1回目アンケート記述 個別でアンケート記述
④	即興的身体表現活動 身体表現熟練者(高橋)のファシリテートにより、「迫りくる恐怖」をイメージした活動を、「音」を使用せずに実施する。但しここでは、「4つのくずし」 ¹⁵⁾ に基づいた身体表現を取り込みながらの活動を実施する。
⑤	即興的音楽表現活動 (2回目) 即興的音楽表現活動を同じグループで再度演奏 ・楽器の再選択, 増加を可能とする。
⑥	2回目アンケート記述 自由記述があるため、個別で記述場所を確保した。

15) 村田芳子著「リズムから表現へ—2つの入り方・4つのくずし—」『女子体育 第51巻 7・8月号』社団法人日本女子体育連盟 2009年 pp.24-25

IV. 調査

〔調査①〕即興的音楽表現活動

今回の即興演奏は、保育者9人中8人が未経験ということもあり、即興演奏を表現する項目として、音楽を形作っている要素を取り上げ、それを参考にしながら保育者同士で即興演奏することを提案した。

これについては、小学校学習指導要領「音楽編」に述べられている「音楽を形づくっている要素」¹⁶⁾（音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れ、フレーズ、音の重なり、など）及び「音楽の仕組み」（反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係など）のことであり、ここでは、保育者たちが、園児たちの就学後の6年間を見通した指導の内容を、意識した創作活動の経験となることを考慮したものである。

〔調査①結果概要〕

	使用楽器	演奏時間
Aグループ	シンバル（マレット使用）、ウッドブロック、大太鼓、オーシャンドラム、木琴、ハーモニックパイプ、タンブリン、ビブラスラップ、小太鼓、グロッケン、トライアングル、ウインドチャイム、ギロ	2分04秒
Bグループ	トライアングル、シンバル、すず、カバサ、木琴、ビブラスラップ、大太鼓、ギロ、ハーモニックパイプ、フレクサトーン	1分45秒

〔調査②〕即興的身体表現活動

参加者全員で村田の「4つのくずし」の内容を用い活動を行った。また調査人（高橋）によるファシリテートでの身体表現活動を実施した。ここでは、前回の調査で、この村田の「4つのくずし」を即興的身体表現活動に用いたことで、保育者たちのその後の即興的音楽表現活動（ピアノ演奏）がしやすくなったという結果を得ていることから、今回もこの内容を取り入れて即興的身体表現活動を行っていくこととした。

「4つのくずし」を基にした活動内容は以下の10項目を基にしている。また、以下の（➡の右側の語彙）に関しては、「音楽を形づくっている要素」（音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れ、フレーズ、音の重なり、など）及び「音楽の仕組み」（反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係など）が関係するであろうと推測できるものを該当させ、動きと音の共有を意識した活動をファシリテート（高橋）している。但し、これについては、保育者たちには公表してはいない。

- ㊦方向の変化（➡変化、音楽の縦と横）
- ㊧場の使い方の変化（➡変化、フレーズ、音楽の縦と横）
- ㊨ねじる
- ㊩回る（➡フレーズ、流れ）
- ㊪跳ぶ（➡リズム）

16) 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編」 文部科学省 p.26

- ㊦素早い (➡速度)
- ㊧ゆっくり (➡速度)
- ㊨急に止めて (➡変化)
- ㊩離れたり, くっついたり, 反対にしたり (➡変化, 音の重なり, 強弱)
- ㊪潜り抜けたり, リフトしたり, 1人ではできない動き (➡音の重なり, 音楽の縦と横)

[調査③] 即興的音楽表現活動

ここでは, 調査①と同様の即興的音楽表現を実施する. 但し, 担当楽器を変更することは可とする.

「調査③結果概要」

	使用楽器	演奏時間
Aグループ	シンバル (マレット使用), ①タンブリン (手), ①タンブリン (マレット使用) ②ウッドブロック, ②ウッドブロック (コロコロと転がす) 大太鼓, オーシャンドラム, 木琴, ハーモニックパイプ ビブラスラップ, 小太鼓, ③ピアノ (和音や単音で表現), グロッケン, ④トライアングル (トレモロ), ④トライアングル, ギロ	2分
Bグループ	オーシャンドラム, すず, カバサ, タンブリン, 木琴, ビブラスラップ, ①大太鼓 (太鼓の両面で2名がそれぞれのマレットを使用して演奏), ギロ	1分53秒

IV. アンケートの調査について

1. 調査①の即興的音楽表現活動後アンケートから（一回目の即興的演奏を終えて）

1.	即興的演奏を行う場合、次に該当するものを選んでください。（複数回答可）		A	B	計
	・即興的演奏はできないと思っている		4	4	8
	・楽器の演奏は苦手でありストレスを感じる				
	・楽器演奏は、決められた楽譜通りに演奏する以外は違和感がある		2	1	3
	・演奏技術がなく、演奏経験が未熟なため創作などできないと思っている		1		1
	・全く問題なく自由な音作りを楽しんで行える			2	2
2.	どのようなことをイメージしながら、演奏しましたか	<p>【Aグループ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・段々となにかが襲ってくる. ・楽器そのものの音に気を取られて考えられなかった. ・恐い音を出さなくては. ・周りの音とのタイミングを気にして、激しく弱くを繰り返そう. ・おばけやしきだ. <p>【Bグループ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きな音、早いリズムが恐怖を感じるだろう. ・誰もいない雰囲気のある場所. ・暗いところ. ・暗い空間にいるイメージ、その中の様々な場面を思い浮かべる. 			
3.	グループで表現している時にどのようなことを感じましたか.	<p>【Aグループ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周りを聴くことをせず、あえてめちゃくちゃにしよう. ・周りの楽器の音やリズムをよく聴こうとしている自分を感じた. ・静かな空間の中で自分だけの音を出すとおかしい、はずかしい. ・一人でやるよりは、いろいろな人が音を出している方が心強い. ・表現のレパートリーが少ないと感じ、静かになった瞬間に何をすればよいのか、何かしなくてはならないと、圧を感じた. <p>【Bグループ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の楽器の音に合わせて、自分の持っている楽器の表現を合わせようとしていた. ・自分のイメージとは違うタイミングで音が大きくなったりするので、グループの人の音を聴きながら演奏しなくては（合わせなくては）と思った. ・おもしろかった、考えずに演奏したが、想像よりも色々な音が出て楽器の使い方の幅の広さを感じるなど面白さがあった. ・気の遣い合いをしていることを感じた. 			

4. 自由記述	<p>【A グループ】</p> <ul style="list-style-type: none">・次をどうしようかという焦る気持ちがとてもあった。行っている最中よりも始まる前の方が不安であった。 <u>a. 即興なのだが、何かの真似がないか考えた。</u>・イメージして音を出したらイメージと違ったとき、次の方法を考える（演奏している間）ときに、とても不自由さを感じた・ <u>b. 決まったものを今までやってきたため、間違いではないのか、合わないのではないかと常に考えていた。</u>・ <u>c. 正解がないため、他の人と合っているのか、難しいと不安を感じた。</u>・ <u>d. 楽譜通りに演奏するのとは違い、周りの音をよく聴きながら、考えて演奏することに大きな不安があった。</u> <p>【B グループ】</p> <ul style="list-style-type: none">・「迫りくる恐怖」というテーマに沿って、どんな楽器を選べばいいか、ということに困った。タンブリンやウッドブロックは明るいイメージなどと迷ってしまい、楽器の導入から不安があった。・ <u>e. 楽譜がないということで、どうすべきかが、最大の不安であった。時間のタイミングもわからないため、どこで終わるかなど不自由がたくさんあった。</u>・「恐怖」と決められるとイメージが湧かなかった。どんな楽器でどのような音を出していけばよいか、また本当に恐怖のように聴こえるのか、聴き手の反応が気になって難しかった。・どんな楽器がいいのか、どんなリズムがいいのか、たくさん考えしまい、前例やサンプルがないことに不安でいっぱいであった。
---------	--

2. 調査③の即興的音楽表現活動後のアンケートから (二回目の即興的演奏を終えて)

1.	次の該当するものを選択してください (複数可)	A	B	計
	①身体表現と音楽表現は、別の表現である。			
	②身体表現が演奏に影響を与えましたか。	5	4	9
	・演奏しやすくなった	4	3	7
	・音に対するイメージが分かりやすくなった	5	3	8
	・その他 記述【Bグループ】 1. 身体の動きの大きさと音の大きさをイメージとして一致した。 2. 自由に表見する勇気が出た。 3. 自由に身体で動いて表現したことから、自由な音の表現ができた。		3	
	③自分で動いた身体表現を自分の演奏に取り入れていた。 記述【Aグループ】 1. 身体表現を行ったことでイメージが膨らんだ。 2. リズムをつけたり、強弱、スピードなどを一回目よりも明確にしたりして表現することができた。 記述【Bグループ】 1. 強弱や速さ 2. 強弱 3. 身体で表現したことを、今度は楽器で行うことでイメージしやすくなった。 4. 今までしたことのない演奏法が、身体の動きを参考に思いついた演奏を試してみた。	2	4	6

		<p>④自分の演奏に、人の表現の動きのイメージを取り入れていた。</p> <p>記述【Aグループ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 攻撃的になったり守りになったりをチームの中でも自分の演奏の中でも生かそうと自然としていた。 2. 周りの動きを汲み取りながら動いたことで、自分の楽器で同じような音を出そうとしていた。 3. 周りの音を聴くと、身体の動きで感じた自分と人との身体の変化から、音も恐怖を与えている人、恐怖を感じている人の違いがわかってきた。 <p>記述【Bグループ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. こういう動きもあっていいのだと感じたことから、演奏にもそれを取り入れた。 	3	1	4
2.	<p>グループで演奏している時にどのようなことを感じましたか。</p>	<p>記述【Aグループ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 会話がなくても何かを感じられる、一体感がなんとなく感じられた。 2. 一回目よりも他の人の動作を気にせず、自分のイメージをそのまま表現することができた。 3. 全員の音に自信が感じられた。自分の音をよりはっきりと演奏していた。 4. 周りの様子に入っていく自分を感じた。 5. 仲間を意識しつつ、自分をしっかりと表現しようと思っていた。 <p>記述【Bグループ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全く違うリズムや音でも一体化しようしているように感じられた。 2. 人の音を感じながら、同じようにやってみようと、恥ずかしさがなくなった。 3. 二回目の方が緊張はほぐれたが、自分を表すことには、やはり緊張していた。しかし、二回目は恥ずかしさもなくなり、自分なりを意識し、楽しんでた。 4. 周りの音の種類やリズムが違って、そこに入ろうとしていたり、出ようとしていたり、一緒に奏でようとする、などの面白さを感じていた。 			

<p>3. 自由記述</p>	<p>記述【A グループ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <u>身体表現を行ったことで恥じらいが減りました. f. 保育の中では楽譜に沿って教えることが多く自由に音楽表現活動をするを増やしていきたいと感じました.</u> 2. <u>前回のピアノ即興音楽表現活動¹⁷⁾の後, 子どもたちに実際に雨が降っている時に, 部屋で g. 私の即興のピアノの音に合わせて体を動かしてみたことがあります. 歌詞があつて踊りの振りを付けてということも楽しいですが, 正解がない分, 自分を全てさらけ出すことができる子どもたちでした. 音楽の自由さが身体の表現の自由さにも繋がると思いました.</u> 3. <u>h. 全身の動きを行うことで, 大太鼓の音のイメージが大きく変わりました.</u> 4. <u>これらの表現活動は, 嫌いではないのですが, 頭で考えてしまい, やはり苦手です. しかし, 楽しいと感じている自分もいます.</u> 5. <u>i. 保育の中で, 会話などでの変化や強弱に気付くことへの必要性をととも感じました. 今回同じ楽器でも相手とは違うイメージで楽器を選択し, 演奏したことに気付いたからです.</u> <p>記述【B グループ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <u>曲に合わせて表現することしかやってこなかった自分は, 言葉と楽器の音色からではイメージしづらいことを感じました. しかし j. 身体というものを介すことで, 周りの雰囲気や吸み取れたことから, 表現しようと思えました. 子どもたちは, もっと自然に面白い表現が出てくると思います.</u> 2. <u>k. 歌をうたいながら好きに動いてみるなどという行為は, 普段禁止してしまいます. しかし, 今回子どもの表現としてなら, 受け入れることができました. 身体で表現することで, 楽器での自由な音表現がやりやすくなったと感じたからです.</u> 3. <u>l. 表現することに, 正解はないのだと, 実践を通してわかりました. 演奏法を見て, 自分が考えた叩き方, 子ども達には本来教えない音の出し方がありました. しかし, それは決まりではないからこそ, 自分らしさが出せる自発的表現になるのだと思いました.</u> 4. <u>今まで自分が出したことの無い音の出し方やリズムを自分なりに表現しました. m. 身体で表現すると自分の気持ちが直接的に身体に表れたため, 楽器演奏も自然に楽しくなりました. 人によってテーマの感じ方や表現の仕方が違うことを発見し, しかし, それが合わさると, 自然と交わっていく, 重なり合っていくなどの面白さが見えてきて, 面白かった.</u>
----------------	---

17) 前掲13)

V. 調査結果

〔調査①〕即興的音楽表現活動と〔調査③〕即興的音楽表現活動の比較について

一回目の即興的音楽表現活動では、楽譜のない演奏についての不安が多くの保育者にあったことが、一回目即興的音楽表現活動後のアンケート調査のaからeなどから明確となった。また、日頃の職員同士の信頼関係を保てている（保育者の口頭意見から確認）、それぞれの保育者が音の反応についてどう感じているのかを不安に思うことや、聴き手側がその演奏を如何に評価するかなどについても日頃の子どもたちの表現活動への見栄えの評価と結びつく問題点がみられた。

しかしながら、一回目と二回目の演奏の違いについては、楽器の使用法の変化や同じ楽器を複数使用することが特徴としてみられた。〔調査③〕では、Aグループは、①のタンブリン、②のウッドブロック、④のトライアングルの複数使用と、その演奏法をそれぞれが形を変えて演奏する姿がみられた。さらに③のピアノを追加することで、音の豊かさに繋がる「和音の響き」を表現している（この保育者はオーシャンドラムとピアノを担当していた）。Bグループは、大太鼓を両面で、二人で演奏する「音の重なり」への変化がみられている。

これらは、〔調査①〕と〔調査③〕の間に実施した身体表現活動からの影響があったと推察することができる。特に「4つのくずし」の「㊦離れたり、くっついたり、反対にしたり」や「㊧潜り抜けたり、リフトしたり、1人ではできない動き」からの影響がみられると考える。

このような〔調査①〕と〔調査③〕の演奏法の変化は、一回目の不安な要素しか感じなかった即興的演奏の後、即興的身体表現活動を経験したことにより、自分を受け止め、他者を受け止め、即興的活動を互いに受け止め合うことができたことが考えられる。これらは、〔調査③〕後のアンケートの言葉からも確認することができる。身体で主体的に活動を行ったことで、それを主体的な音楽表現に自力で形作っていくことを意識したと捉えることができよう。それは保育者たちの身体活動の記録から「いきいきとのびのび」という活動が動画記録された（以下の右写真）ものから目視で確認できている。



【即興的音楽表現演奏場面】



【即興的身体表現活動場面】

〔調査③〕即興的音楽表現活動後のアンケートでは、即興的音楽表現の合間に、即興的身体表現活動を取り入れたことから、被験者全員がこの身体表現が演奏に影響を与えたと回答している。さらに、9人中7人がその後の即興的演奏がしやすくなったと回答している。

〔調査③〕の自由記述【f, g, i, k】からは、保育者自ら保育の場面を想像して取り上げる言葉が多々あり、自発的活動への期待や新たな取り組みをイメージしている。

「g」の保育者の発言からは、既に前回の調査後、自分の即興的演奏を保育活動に導入していることから、今回の活動の実践からは、これまでの自発的活動の不安を解消できた確認の活動となったといえよう。また、保育者自身が身体表現から感じた音楽表現の新たな感覚についても明記されており【h, j, l, m】、子どもたちへの創造的活動について新たな感触をもったのではないかと推察できる。「l」の保育者については、表現という活動を既成的な活動のみに頼るのではなく、「正解がない」ということを、子どもたちの自発的活動に繋げていくための過程を大切にする活動を、今後に期待することもできよう。また、「m」の保育者については、音楽と身体表現活動の関係性を未分化な乳幼児期であるからこそ、その利用価値を革新的に今後の保育に繋げていけるのではないかと、筆者は捉えている。

今回の主体的な音楽活動は、身体の自由な活動を取り入れたことから、その後の即興的演奏では、他者との演奏を互いに高め合い、仲間を意識することでより演奏がしやすくなったと保育者たちが感じているといえよう。〔調査①〕では、他者を意識しすぎて遠慮などや、自由な表現についての先入観（a～e）などで自分が出せなかった保育者が殆どであった。しかし、〔調査③〕では、他者の音を聴きながら、強く主張したり、守りに入ったり、チームの中で自分を生かそうとしていた。他者と同じ動きを正解とするのではなく、全く予想されていない活動から、自分なりを表現するという表現活動が、身体と音楽という今回の活動を通して、保育者自らが音楽による主体性を発見することができたといえる。

VI. 今後の課題

身体表現において、保育者の指示通りに動いたり、振り付けを覚えて踊ったりすることは、技術的にも協同的にも子どもが成長する活動の一つとして必要なものであるといえよう。また楽譜通りにピアノで演奏するという技術力の向上に重きを置き、そこから音楽の表現力を向上させることも、これまで保育者が経験してきた中の重要な過程であったといえよう。しかし、子どもたちの「自分なりに」という活動に対しては、子どもの表現の多様性に保育者が気づき、その表現を受け入れるという過程がポイントとなる。その必要性や意義を保育者が理解し、その実践に保育者自身が取り組むことは、子どもたちが多様性を持った学び方を身につけていくことができる活動に、何らかの影響を与えるものとなるはずである。

音楽や身体といった技術面が評価される印象を持っている表現分野を、子どもの主体的活動を育むための表現活動へ視野を広げていくため、子どもたちの未分化な時期を生かした表現教育の方法論を具体的に提示し、保育への有用性を明確にしていくため、具体的な活動方法を今後も考察、探求していきたい。

<謝辞> ご協力いただきました静岡県 J 幼稚園の職員の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

清水 満・小松和彦・松本健義著『表現芸術の世界』萌文書林 2010年

小島律子監修『新訂版 小学校音楽科の学習指導』廣済堂あかつき初版2011年 第五版2015年

文部科学省 『幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究—感性・表現の視点から—』2016年

Gutman L.M.,&Schoon,L.,Heckman,J.J.,& ter Weel,B.2008.

The Economics and Psychology of Personality Traits. IZA Discussion Papers, No.3333